

「コロナ禍の中等科高等科の生活」

女子部部长 佐藤史伸

男子部部长 更科幸一

2020年度の「コロナ禍での生活」を振り返るとき、2020年度の最初の礼拝で読んだ次の聖書箇所と話を思い出す。

聖書：ローマの信徒への手紙5章3～4 「苦難をも誇りとしめます。私たちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを」

「この聖書の箇所は、今、私たちが直面している新型コロナウイルスによる困難を、どのように乗り越えていけばよいのかのヒントになる。この状況に私たちは、正しい理解のもと、苦難に雄々しく立ち向かい、できることを行い、私たちが本当に大切にすることは何かを考え、希望を持って進もう、今の状況を前向きに捉え、今だからできることを考え、そのことを楽しんでできる人でありたい」と話した。そのような1年になったと思っている。

1. 中等科・高等科の生活

2020年度の1学期からの日々は、コロナ対応に明け暮れた日々だったが、創造の日々であったとも言える。社会では、今までの経験則が通用しない、新たなことがたくさん起こった。自由学園もその例外ではなかった。1学期間ずっとオンラインの授業、生徒のいない学校に出勤するなんて思ってもいなかった。でも、繋がりを大切にしたいと新たな試みがいくつもあった。今できることは何かを考え、自分の属する社会を少しでも良くするために、知恵を出し合い、考えた。大変ではあったが、ワクワクするような新しい発見のある日々であったと思う。その中で、確信したことがある。それは、これでよいということではなく、社会の課題の本質を知り、そのことに向き合い、今、自分が属している自由学園という社会で実践し、「創造」を繰り返していくことが、必要であるということだ。別の言い方をすれば、目指したい社会をこの自由学園で実現することだ。そのために、新しいものを創造すること、つくりだすことが必要なのである。2020年度の体操会など、これまで大切にしてきたことを振り返り、本質を考え、創造することができたと思う。

2. 「コロナ禍の私たちの社会を考える会」の活動

学校での新型コロナウイルスの感染が各地で起こる中、8月24日2学期をやつとのことで再開した。感染者に対する差別、誹謗中傷が社会で起きていることに不安を感じていた女子部・男子部の委員長を中心に、「コロナ禍の私たちの社会を考える会」を立ち上げ、「感染者に対する差別をなくすためにどうすればいいか」を自分事として考える取り組みが始まった。彼らは「社会ではなぜ差別が生まれてしまうのか」を徹底的に突き詰め、「学校の中で感染者が出たとしても、差別は絶対に出さない」という強い意志を持って活動した。新型コロナウイルスに関する正しい知識について、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、学校医などに話を聞き、社会で差別や偏見が起こってしまうのはなぜなのかを話し合った。10回以上にわたる議論を踏まえ考えたことをプレゼンテーションする約10分間の動画を作成。8月26日に、全校生徒に向かって問題提起をした。生徒には、動画を見た上で「もし、体温を測って37.3度以上あった時、みんなに伝えられますか？」、「自分が感染してしまったら、何をしてもらいたいですか？」、「友達が感染してしまったら、自分に何が出来ますか？」などの質問を投げ掛け、この問題に対する意見を募った。その後もこの意見を受けての対話の会や劇を作る活動を精力的に行なった。この活動は、多くの生徒に差別や偏見を

自分ごととして考えてもらう良い機会となり、それは、このコロナの状況下で自分たちがどんな学園をつくればいいかを問うことでもあった。そしてそれらの考えと行動は、学内だけにとどまらず、社会に対しても行動することができた。

3. コロナ禍の自由学園の新たな学び

2020年4月からはオンラインで学ぶことが続いていたが、コロナ禍で自由学園が大切にしている学びが減っていた。6月ごろから自由学園らしい学びができないかということを生徒たちが考え始めた。考える材料として、コロナ禍の日本社会で私たちとは比較にならないほど痛み苦しんでいる人がいることを生徒に伝え、現場に足を運び知る機会を設けた。具体的には、一般社団法人 Colabo という、夜の街を徘徊している女子高生のサポート団体や特定非営利活動法人 TENOHASHI & 認定 NPO 法人世界の医療団というホームレス支援をしている団体である。生徒たちはまずはやってみようということで、8月18日にTENOHASHIさんに伺い、ホームレスの方に渡すおにぎりをつくり、マスクや消毒液を袋に詰め、21:30から池袋の公園で配り、その後はホームレスの方がいらっしゃる場所を探しながら池袋の街を回った。2回目は10月21日に自由学園の台所で15kgのお米を炊き、ふりかけを混ぜ1個200グラムのおにぎりを150個ほど作り配った。クリスマスには女子部の生徒も参加し、クリスマスカードとクッキーをつくり、おにぎりと共にお渡しすることができた。その後も活動を継続し2020年度は合計5回の活動を行うことができた。創立者が小さき弱き声、声なき声に耳を傾け、様々な取り組みを行ってこられたことと同様に、コロナ禍で差別を少しでも解消するために、生徒が良い社会を創ることに力を出せた取り組みである。



図1 生徒同士の話し合いの様子



図2 おにぎり配布の様子

4. 終わりに

最後に、創立者のお一人羽仁吉一先生の残された言葉で、コロナ禍の中で心に留めておきたい言葉を紹介する。それは、吉一先生が書かれた雑司が谷短信上巻の「組織の神秘」の中にある。<組織は事務でない、愛である。組織は「他」への呼びかけの意識から出発する。組織は強制ではない、信頼である。それぞれの場所に、それぞれの能力が、深い信頼をもって置かれることである。組織は形式ではない、生命(いのち)である。あらゆる場合にに応じて創り出され、また成長する。>

とくに、組織は、愛であるという言葉に惹かれる。私たちが人と関わりながら生きていく社会において、愛の足りない行動をとってしまうことがある。差別についての問題もそうだ。人は弱い存在である。皆で、創立者が願われた「愛のある、信頼の組織(社会)」を創っていきたい。

